
彼女は俺のペット!?

FUSE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女は俺のペット！？

【Nコード】

N1840C

【作者名】

FUSE

【あらすじ】

彼女いない暦17年の藤原正直は、高校生活の間になんとか青春を味わいたくて、好きな女の子に告白するが、断られてしまう。そんな主人公がペットを飼い始める。そのペットの正体は……（半永久的に休止）

ブローグ

「好きです。俺と付き合ってください」

「……ごめんなさい、私、好きな人がいるから」

俺の恋は再びここで幕を閉じた。

ふじわらまさなお

藤原正直、17歳の高校3年。

高校最後の甘い夏休みを送るため、始業式から狙っていた彼女に告白したのだがあえなく撃沈。

あゝ俺は青春を味わうことなく散っていく負け犬か。

告白した彼女の名前は岸本^{きしもとかすえ}和恵。

腰まで伸びる艶やかな黒髪、女神みたいな輝かしい笑顔、学園の中でもA A Aクラス間違いなしだ。

「やっぱり何の過程もなしじゃあ断れるのは目に見えてたけどな」
別に俺と和恵は仲がよかったわけでもなく、ただ一緒のクラスって
いうだけの関係だった。

俺の心の中とか友達内の会話では和恵のことを、和恵と呼んでるけど、本人の前では岸本さんと呼んでいる。

勝手に自分の妄想の中で和恵といろんなことをしてたと思い込み、告白しても成功すると思っていた。
だが現実には甘くなかった。

「正直、お前マジで告ったのか？」

教室に戻るとクラスの皆に、このことは既に広まっており、俺の周りには即座に野次馬どもが群がってきた。

「一体どこから仕入れた情報だよ」

「お前が岸本さんを誘ったとしたら、告白しかねえだろ！それでどうだったんだよ」

因みにさっきからペラペラと喋ってるやつは、俺の親友というか

古い友達というか、幼稚園からの腐れ縁の仲の川本正通だ。かわもとまさみち

俺が予想する約20分前の教室内の光景は多分こうだろう。

20分前の予想

「おい、正直いや、藤原が岸本さん呼び出したぞ」

俺と和恵が校庭に出て行くところを目撃した川本は教室に戻り、大声でクラスの皆に報告した。

しかも俺が和恵のことが好きだってこともバラしたに違いない。

「おい、まさかダメだったとか言わないだろうな？」

「そのまさかだ」

俺はそう言っで、自分の席に戻り、机にうつ伏せになって寝るフリをした。

このままだと泣きそうだったしな。

「和恵なんで断ったの」

「だって……」

和恵が友達からいろいろ追求を受けてるのが聞こえてきた。
今思えば悪いことしたな。

「正直、元気だしなよ。一回や二回失恋したぐらいでクヨクヨするなんて正直らしくないよお」

俺の前の席の女の子が俺を慰めてくれた。

ついで言っでこいつも幼稚園からの幼馴染の、芝地尊子だ。しばちたかこ

茶髪で今時珍しいポニーテール。見た目は運動できそうなんだが、これがすごい運動オンチだ。

「尊子にはわからないんだよ。俺の気持ちなんか」じゆんこ

「おいおい、尊子に当たるなよ」そんこ

「もう、私の名前は尊子だよ。何回言えばわかるのよお」たかこ

俺と正通と尊子は幼稚園からの仲良しなんだが、当初は尊子の読み方がわからなかった。

先生か誰かに聞けばよかったものの、俺は辞書で調べ、尊いと読むことを知り、中学まで尊子と勘違いしていた。

正通も同じで、尊敬の尊と読むと知り、中学まで尊子と思い込んでいたらしい。

それを今更直せといわれても、一度定着した呼び方を変えるのは難しく、俺達はそのまま突き通している。

なんで中学まで気づかなかったかというと、

「なんで私のこと尊子とか尊子って呼ぶの？」

って聞いてきたからだ。

向こうはそれをただのあだ名か何かと勘違いしてたらしく、中学3年の時ようやく、3人の勘違いが解けたというわけだ。

尊子とか尊子と呼ばれて、返事をする尊子も尊子だけだな。

「正直、女つてのは世の中星の数だけいるんだ。あんなAAAランクは天然記念物並に少ないけど、まだ人生長いんだ」

お前に人生論を語られるほど、俺は人生を捨ててはいない。

でも今の俺は一人になりたいため、教室を出て行き、仮病と偽り、早退した。

早退してどうなるわけでもないが、俺は自分の部屋で携帯に入っている、和恵の写真を眺めていた。

「なんで告白なんかしちゃったんだろ」

っという後悔の言葉が何回も頭によぎった。

世の中やらなくて後悔するよりも、やって後悔したほうがいい、っていう言葉があるみたいだが、あんなのうそっぱちだ。

やった後の後悔の自分の心はズスタズタだが、やってなかったら心が傷つくこともないし断然イイ。

クソ、俺は明日どんな顔して和恵に会えばいいんだ。

俺はそのまま悩みながら晩飯も食わずに朝まで眠りについた。

次の日の朝、早くに寝てしまったせいか、いつもより1時間も早く目を覚ました。

でも学校に行く意欲がわかず、そのままベッドの上でゴロゴロしていた。

するといつも起こしにこない母さんが珍しく俺を起こしにきた。

「正直、尊子^{たかこ}ちゃんと、川本君が来てるわよ」

母さんの後ろには 尊子^{とこ}と正通が既に制服姿で立っていた。

おいおい、まだ7時前だぞ。そんな早くに来てどうするんだよ。

「ドタバタしててごめんね。それじゃあゆっくりしてってね」

母さんも母さんだ。

こんな朝っぱらからゆつくりできるわけねえだろ。

「正直、悪い、30分だけ寝かせてくれ」

おい、来て速攻それか。

「正通君には悪いことしちゃったかなあ。私が無理言っについてきてもらったんだけど」

尊子^{とこ}がそう言いながら、正通に謝り、俺の目の前に腰を下ろした。

「つで何のようだ？こんな朝早くから来る用事なんかないだろ」

「う、うん。そうだけど、昨日正直が早退したから、今日学校来るか心配で・・・」

「お前に心配されなくても学校ぐらい行くよ」

行かなかったら母さんがうるさいしな。

その後、2人と一緒に朝飯を食い、共に学校へ向かった。

「おい、藤原、川本聞いたか？」

学校の靴箱で同じクラスの男友達が、慌^{あわただ}しく俺達に話しかけてきた。

「岸本の奴、昨日から行方不明らしいぜ。家にも帰ってないらしい」

はあ？まさか昨日の告白が原因か？

「だから午前中は学校生徒全員で岸本を探すみたいだぜ」

そいつは素晴らしい残して、クラスのほうへ走っていった。
随分忙しい奴だ。

「おい、正直どうする？こりや和恵フラグ立ったんじゃない？」

正通が俺をからかうように肩に手を掛けて言ってきた。

「何だよ、和恵フラグって」

「ギャルゲーでよくあるパターンだろ？好きな彼女が行方不明、それを主人公である正直が見つけ出す、そして……」

「バカバカしい。そういうのはゲームだからありえる話だ。現実になんか起こるのか」

俺は正通の手を払いのけ教室に向かった。

「ねえ、岸本さん探さなくていいの？」

めんどくせ。

「お前が見つけないとフラグ立たねえぞ」

知ったことか。

俺は二人を無視し、誰もいない教室にはいり、皆が戻ってくるまで寝ることにした。

どうせ、ただの家出か何かだろ。そんな大騒ぎすることじゃないさ。

「……わらくん……ふじわらくん……藤原君」

誰かが俺を呼ぶ声で目を覚ました。

時計の針は10時を指していた。

周りにはだれもいない。

一体誰が俺を呼んだんだ。

「藤原君ここ」

「う、うわー」

俺は椅子をひっくり返して立ち上がり、机の上の喋る物体に驚いた。

「リスが喋ってる？」

俺の机の上にはちょうど手のひらサイズのシマリスが立っていた。

「藤原君、私の言葉がわかるの？」

「わかるけどお前誰だよ」

俺はひっくり返した椅子を戻し、座りなおした。

「信じてもらえないかもしれないけど、私、岸本和恵です」

「はあ？」

第1話（前書き）

告白を断られた和恵が行方不明。

学校の皆が搜索中に主人公正直は教室で昼寝をしていた。
すると目の前に和恵と名乗るリスが現れた。

第1話

まだ俺は夢を見ているようだ。

リスが喋るとは普通にありえない。

しかもその喋るリスが今、行方不明になっている和恵とか現実にしておかしすぎる。

俺は思いっきりほつぺたをつねり、夢から覚めようと試みたが、痛いだけでさめる気配はない。

「藤原君、信じて夢じゃないよ」

痛いってことは夢じゃないみたいだ。

夢じゃなかったら熱があるのか？

ちよつと保健室に行つて来るか・・・

机の上にいたリスの幻覚をほつといて俺は保健室に向かった。

「なんだ先生いないのか」

保健室はもぬけの殻で、仕方なく戸棚から体温計を拝借して、熱を測った。

「36度5分か、平熱だな」

多分寝ぼけていたんだろうと、自分なりの答えをだし、教室に戻った。

だがその答えは一瞬にして崩された。

「あ、藤原君。よかった、戻ってきてくれて」

未だ俺の机の上にシマリスがいた。

「一つ聞かせてくれ。お前が岸本さんだという証拠はあるのか？」

「・・・今は信じて、しか言えない」

つとしばらく考えた後にそう言った。

信じようにも、こんなこと非現実すぎる。

だとしたら、他のやつにも聞いてみたらいいんだ。

「ちよつと、俺と一緒に来い」

つと手のひらを差し出し、その上に乗るように指示した。

流石に掴むのはどうかと思ったしな。

俺は和恵と名乗るリスを肩に乗つけて、外に飛び出し、正通か尊^と子を探した。

言っておくが俺の友達は決してこの二人だけではない。

この二人の言葉が一番信用できるから、その二人に聞くまでだ。

つとちょうどいいところに正通がいた。

「正通ちょうど良い所に」

俺は息を切らせながら、正通の所に駆け寄った。

「やっぱり正直も和恵のこと探してたのか。隠れて探してたって所か？」

別に隠れてもいないし、探してたのは和恵じゃなくてお前だよ。

「か、和恵？私川本君に名前と呼ばれる覚えないけど」

肩に乗っていた和恵がそう言った。

「だそうだよ」

「ん？それよりお前なんで肩にリスなんか乗つけてんだ？」

こいつ本気でボケてるのか？それとも和恵の言葉が・・・

「おいさつきこいつの言ったことわからなかったのか？」

「はあ？リスが喋るわけないだろ。正直、お前の頭がおかしくなる理由はよくわかる」

全然わかってないって。

それより本当に和恵の言葉は俺にしかわからないようだ。

「だから言っただじゃない」

いや、まだ俺は信じたわけではないぞ。

この後尊子や他の友達にも聞いたが、みんな揃って同じ答えが返ってきた。

「あとは警察の人に任せて、お前達は学校に戻れ」

先生が俺達を呼びにきた。

ちようどお昼の10分前ぐらいだ。

「とりあえず、お前の言葉は俺にしか通じないのはわかった。でもお前が本当に岸本さんかまだ信じてないからな」

つと中間報告みたいな感じを言って、俺は教室に戻った。

別に重荷に感じるわけでもないし、肩に乗つけとくぐら構わないだろ。

俺は教室に戻り、いつものメンバー、正通と尊子の3人で机をくっつけて昼食をとった。

尊子も変わり者で昼ぐらい女同士食べれば良いものの、何故かこっちの輪に入ってくる。

「そっぴや、何でリスなんか肩に乗つけてるんだ？朝は乗ってなかったよな？」

正通が弁当を食べてる途中に話の話題を変えて聞いてきた。

「しかも大分なついてるみたいね。ほら私だと逃げられちゃう」

尊子とっこが和恵の触ろうとして、逃げられた所を俺にアピールした。

こういう時はどういえばいいんだ？

本当のこと言っても笑いの扱いされるのはわかりきっている。

拾ったと言っても、こんなになつくはずないと反論されるの目に見えている。

「いつの間にかいた」

「はあ？」

人間追い詰められると何を言うかわからないものだ。

でもいつの間にかいたのは確かだ。

寝てたらいつの間にか俺の机の上にはいたんだからな。

「どこにいたんだよ」

「俺の机の上」

突っ込まれることを恐れず、ぶっちゃけることにした。

ある程度は伏せたが・・・

「それって鶴の恩返しみたいな感じで、正直に恩返ししに来たんじやないの？」

尊子とっこがまたわけのわからないことを言い出した。

「おい正直、お前最近リスに恩返しされるようなことしたのか？」

「してねえ。それに野生のリスなんか滅多に見ないだろ？ここはどこつかというと都会だし」

「それもそうだね。だったらどこから逃げ出てきたんじゃないの？」

そう考えるのが妥当だろうな。

俺もみんながそう思っていてくれるほうが、後々――

「よし、このリスの飼い主を放課後にでも探そうぜ」

「それいいね」

なんでお前達はそうなんでもかんでも首を突っ込むんだよ。

「まずはうちの学校の生徒にいないか聞き込みしないといけないな」

「私は部活の後輩達にも協力を頼んでみるよ」

2人はやる気満々で作戦会議みたいのを開いていた。

「何か大変なことになってきたね」

「別に。今日のはただのカラ元気だよ」

和恵がいなくなっただうちのクラスでは、落ち込んでいる奴や、泣いている奴も少なくはない。

この2人も無理していつも通りを装っているみたいだが、昔から一緒にいる俺にはすぐにわかった。

「なんか私のせいでこんな空気にしちゃって、申し訳ないな」

「お前のせいじゃないだろ。好きでそんな姿になったんじゃないし」

そう言って、空になった弁当箱をカバンにしまい、教室を後にした。

流石に俺も教室にいたら、気が重くなる。

「そつえばそんな姿になった記憶とかないのか」

校庭で散歩がてらに俺の肩に乗っている和恵に聞いた。

「うん。昨日放課後で図書室で勉強してて――」

「しててなんだ？」

「藤原君に告白されたこと思い出してたの」

「な、な、なんでそんなこと？」

めちやくちゃ動揺しまくったができるだけ平静を保ちながら散歩を続けた。

「私、告白されたの初めてだったから」

俺は次にいう言葉がなく、無言でそのまま学校を1週した後、教室に戻った。

「それじゃあ俺は先に帰るわ」

5、6時間目が終わり、正通と尊子とくこに挨拶して教室を出た。

「お前はどつするんだ？」

視線を前に向けたまま、肩に乗っている和恵に聞いた。

「どつするって？」

「言っておくけど、俺ん家ペット禁止だぞ」

「あれ？一軒家じゃなかったっけ？」

そうだけど、ペット禁止の意味はこれ以上ペットを飼えないという意味だ。

俺の家では既に犬と猫とモモンガを飼っている。

これ以上増えたら親がなんていうか……

それにムウだけでもラッシュとダークから守るので精一杯なのに、飼えるはずがない。

いつラッシュとダークにムウを食べられるかわからないからな。

因みにラッシュは犬の名前で、ダークは猫、ムウはモモンガの名

前だ。

しかも妹が2人いるし、こんなシマリスを見つけたらどこに持ち出すかわかったもんじゃない。

「っということどこに泊まれ」

っと俺が連れてきたのは保健室だ。

ここなら布団もあるし、寝るのには困らないだろう。

「私一人で夜を明かすの？それだけは嫌」

嫌といわれても、ラッシュとかダークに食われるよりマシだろ。

「大丈夫、私逃げるのは得意だから」

傲慢になつてないよ。

でもまあ、こんな姿になって、話が通じるのは俺しかいなかったら心細いだろうしな。

「しょうがねえな。家についたら俺から離れるなよ」

「うん」

っとなん保健室を後にして、岐路についた。

第1話（後書き）

書きなれない恋愛小説にダラダラとなっていてしまってますが、暖かく見守ってほしいです。

第2話

「ただいま」

家に着き、玄関で靴を脱いでいると妹の楓が後ろから抱き付いてきた。

「おかえり」

まだ中学2年生だし甘えたい年頃なのだろう。

因みに和恵にはブレザーのポケットの中に隠れてもらっている。

「鞆、お兄ちゃんの部屋に持っていったいてあげるよ」

上機嫌に両手を差し出して、俺からカバンをひたたくって行った。

「ああ、ありがとう」

いつもは持つていつてくれないのだが、いいことでもあったのか？

俺はリビングに向かい、一息つくためにジュースを一気飲みした。

「お兄、楓の奴またムウと遊んでたよ」

つと俺に告げ口をしてきたのは一番下の妹、中学1年の京子だ。

また勝手に触りやがって、もしかして俺の部屋に入れさせないた

めに、鞆を・・・

「おい、楓」

俺は急いで階段を駆け上がり、自分の部屋に直行した。

あいつはおもしろがって、虐待に近い行為平気でしやがるからな。

「あ、お兄ちゃん」

部屋は荒れてないが楓の半泣きの声で絶対何かあると確信した。

京子が言ってたことを思い出すと、何があったかすぐにわかる。

案の定、ムウが入ってるはずのゲージはもぬけの殻だった。

「また何かやったのか？」

「飛ばそうとしてたらどっかいったやつた、アハ」

アハじゃねえよ、第一モモンガは鳥みたいに飛べないってこの前教えたばかりだろ。

「ここの部屋で飛ばしてたからこの部屋に絶対いるはずなんだけど」

「楓はもう下に行ってる。あとはお兄ちゃんが探しとく」

「ごめんね」

楓は両手を合わしながらドタドタとしたに降りていった。

「さてと・・・おい生きてるか？」

今までポケットに入れっぱなしの和恵を取り出し、生存を確認した。

でも和恵はピクリとも動かずグッタリとしていた。

「おい和恵、おい」

「ん？なにに」

寝てたのかよ。動物化してたら寝てるのか死んでるのかわかりにくいぞ。

「とりあえずお前は今はこの中に入っとけ」

つと和恵をムウのゲージの中に入れた。

その時ムウのエサが全く減ってないのに気づいた。

もしかして、俺が尊子らと一緒に学校に行った瞬間、ムウを取り出したのか？

どっかで餓死してなければいいが。

そういえば和恵は何か食ったのか？

「お前、朝と昼は何食った？」

「学校近くの木の実をちよつとだけ」

やっぱ人間の食い物は食べれないのかな。

でも食える木の実なんか学校周辺にはないはずなんだけどな。

リスだけが食える木の実とかがあったのか？

「なんかこの身体になって食べれるのと食べれないのが区別できるの」

野生の特性みたいなものか？

「とりあえず食べれそうなものすべて持ってくるから、そこからお前が選んでくれよ」

「うん、わかった」

俺は冷蔵庫に向かいリスが食べそうな野菜全て、手のひらサイズ

に分けて、2階に持って上がった。

その途中ムウの泣き声が聞こえた。

泣き声と言ってもほとんどの人はモモンガの鳴き声など聞いたことないだろう。

「グア」

これがモモンガの泣き声だ。

耳を澄ませば俺の部屋から聞こえてきてる。

「おい和恵、近くにムウが……」

「ここにいるわよ。藤原君のムウ」

ってなんか二人とも、いや二匹とも楽しそうに向かい合って話をしていたみたいだ。

「お前、ムウの言葉わかるのか？」

「うん。なんか普通に言葉通じるけど、なんでかな？」

俺にはグアグア言ってるだけで、全くわからないがリスとモモンガは同じ仲間なのか？

今度調べとくしよう。

「とりあえず一通り持ってきたから、食べそうな物があつたら食ってくれ」

「あ、別に良いよ。私これで十分だから」

つとムウのエサを食べていた。

せっかく厳選して選んできた俺の努力は水の泡じゃねえか。

仕方なく、さっきとってきた野菜を元の場所に戻しに行った。

「楓、ムウ見つかったからな」

妹にそういつて、日課のラッシュの散歩に行くことにした。

前にも話したがラッシュとは俺ん家で飼っている犬のゴールデンレトリバーだ

そういえば和恵も連れて行ったほうがいいかな？

玄関で叫ぶこともできなく、わざわざ自分の部屋に行き、和恵を誘った。

「岸本さん、今からラッシュの散歩に行くけど、一緒に来る？」

相変わらず、情けなく本人の前では名前を呼べず苗字で話しかける。

一回名前で呼んでもいいか聞いてみようかな。

「うん、行く」

和恵の返事は即答で、俺の手からつたり肩の上に乗った。

今思えば音楽を聴きながら散歩してるだけだし、和恵を連れてきても意味なかったな。

こんな道端で喋ってるのを誰かに見られたら、間違いなく変人扱いだしな。

まあ、和恵にとってはいい息抜きぐらいにはなるだろう。

チヨコンと俺の肩に乗っているだけだが……。

散歩コースの半分を終え、のんびりと歩いていると急にラッシュが吠え出した。

つということは近くにあいづがいるってことだ。

「よお藤原、今日も会ったな」

同じクラスの松岡清治だ。まっあかせいじ

身長が180近くもあるかなりの美男子で、毎日女の子から告白されている事で有名だ。

あとラッシュがほえているのは松岡じゃなくて、その足元にいるブルドックのジョンだ。

当然ジョンのほうもラッシュに向かって吠えまくってる。

「おや、それが今日女子達が話してたリスか」

つと松岡は俺の肩に乗っている和恵に手を伸ばしてきた。バゝ力、和恵は俺以外には触れないんだよ。

既に尊子と正通で実証済みだ。

でも和恵は逃げもせず、松岡の手のひらでじっとしていた。

「どうして……」

「ハハ、かわいいじゃないか」

松岡は一指し指で和恵の頭を撫でながら、可愛がっている。
なんだこの苛立ちは……。

俺以外の奴の手に渡ると無性に腹が立つ。
「もういいだろ、返せよ」

つと和恵を強引に俺の手のひらに乗せた。

「名前はなんていうんだい？」

「まだ、決めてない」

「それじゃあ、マリアはどうだい？」

「断る」

俺ははつきりと言いきって、敵意むき出しにしてるラッシュを引っ張りながら家に帰った。

名前か、確かに和恵じゃあ世間的におかしいから、もうひとつの名前を用意する必要があるな。

「あれ？あれ？私今までなにを……？」

「おい」

自分の部屋に戻る途中、急に俺の手の上で和恵が暴れだし、落とさないように手を胸に引き寄せた。

そういえば松岡に触れてから硬直状態になってたけど、一体どうしたんだろ。

「あ、私松岡君に……恥ずかしい」

そう言って、俺の手から机に飛び乗り和恵はムウのゲージの中に入ってしまった。

「おい、どうした？」

どうやら閉じ籠もってしまったみたいだ。

なんだあいつ、変な奴。

俺はそのまま飯を食いに下に降りるため、自分の部屋の電気をつければなしでリビングに下りた。

「さてとそろそろ寝るとするか」

あれから和恵はずっと閉じこもってるが大丈夫か？

「岸本さん、もう寝るけど寝る場所はそこでいいのか？」

「ここでもいい」

生きてはいるみたいだ。

俺は電気を消し、布団の中にもぐりこんだ。

今日はいろんなことがありすぎたが、明日からどうしよ。

一応和恵を学校に連れて行くべきか。

その前になんで和恵がこんな姿になったのか、あと戻る方法とかあるのか調べないといけないしな。

そついや、和恵本体はどこいったんだ？

そのまま人間がリスの姿になったとか考えにくい。

冷静に考えると、山のような疑問があふれ出てきた。

とにかく考えるのは明日からにしよう。

それに俺一人でどうこうできる問題じゃないしな。

あ、その前に名前……

明日、学校に行く前に和恵と話し合うことにするか。

第3話

「正直、遅刻するよ」

誰かに身体を揺すられている。

「あと30分」

「何真面目な解答してるのよ。こういう時は5分でしょ。って2度寝しない」

「ぐはっ」

腹部に強烈な圧迫感を感じて、俺は飛び起きた。

「おはよう、正直」

「おはようじゃねえ、何乗せたんだよ」

起こしにきた犯人は尊子で、俺の腹部に乗かかってきたのは、昔使っていた5キロのダンベルだ。

「内臓破裂したらどうするんだよ」

「ごめん、起こすのに必死で近くにあったもんだったから」
「いつか人殺ししかねんな」

時計を見るとまだ7時半だ。

なんだまだ余裕があるじゃねえか。

「それじゃあ下で待ってるからね」

「ああ」

やれやれ、朝から騒がしいたらありやしねえ。

俺はハンガーにかかってある制服をベッドの上に置き、パジャマを脱ぎ始めた。

「あ、あ、あ・・・ちよつと」

そういえば和恵がいたんだ。

「もう起きてたのか」

ゲージの扉を開け、和恵を中からだした。

「うん、芝地さんの声で・・・いつも起こしにきてくれるの?」

「そうだな、ほぼ毎日だな」

既に日常茶判事だから、気にしてなかったけど、もしかして俺って結構いい身分かも。

そつだ、学校に行く前にいろいろ決めとかなくちゃいけなかったんだ。

「岸本さんは今日も学校に行くのか？」

「うん。授業についていけなくなったら困るし」

それって戻れることを前提にしてるだろ。

まあ、いつまでもこのままってことはないと思うしな。

「あとは名前だな。どういう名前がいい？和恵だからかーくんとか？」

「なんか男っぽいから嫌。クルルとかかわいい名前がいい」

「じゃあそれで」

つという時間も時間だったからそれに決定した。

その後、和恵には後ろを向いてもらってるうちに制服に着替え、和恵を肩に乗せて1階に降りた。

「尊子ちゃんいつも悪いね」

「いえいえ、好きでやってますから」

1階に降りると尊子と母さんが朝食の片付けをしていた。

テーブルの上に残ってるのは俺の分だけだ。

妹二人は毎日部活みたいで、俺が起きる時にはいつもいない。

「ぼーっとしてないでさっさとお食べ。尊子ちゃんを待たせるんじゃないよ」

いちいち言われなくても分かってるよ。

俺はご飯に味噌汁をかけ、一気に口の中に流し込み、数秒で食べ終わった。

「早いね」

「男だからな」

根拠もない返事をし、俺は尊子と一緒に家を出た。

「芝地さん、おはよう」

「松岡君、おはよう」

背後から現れたのはハンサムボーイの松岡だ。
こいつといると厄介なんだよなあ。

「マリアも連れてきてるのか」

つと俺の頭に乗っている和恵の頭を撫でる。

和恵はただじっとしているだけだ。

和恵はなんでこいつだと無抵抗なんだよ。

「あとマリアじゃねえ。クルルだ。勝手に名づけるな」

「それは失敬」

つとハンカチをポケットから取り出し、しらじらしく額の汗を拭いている。

多分美男子だから絵になるのだろう。

俺みたいな奴は服の袖で拭くのがお似合いさ。

「それにしても今日は暑いね」

「もう夏だからね」

尊子は苦笑いしながら話を合わしてる。

「今日の昼休み屋上に来てくれ」

「え？」

松岡が、尊子に聞こえないように、俺の耳元で耳打ちしてきた。

「それじゃあ、俺は急ぐから」

つと俺の有無を言わずにさっさと行っちゃった。

俺を呼び出すとか、意味がわからねえぞ。

男が女を呼び出すなら、今の時期では大体見当がつくけど、同姓を呼び出すとか前代未聞だぞ。

呼び出される覚えもないし、何か本能的に嫌な予感がある。

まさか……

「どうしたの？顔色悪いよ」

「いや、なんでもない」

相当悪い顔をしていたのだろう。

俺は生返事をし、再び松岡に呼び出されそんな理由を考えた。
今、冷静に考えれば、思い当たる節は結構ある。

あれだけルックスがよくて女子にもモテモテのくせに何故、具体的に特定の女子を作らないのか。

その先に俺が思い当たる答えは1つだ。

ガチホモ。

嫌だ。俺はいたってノーマルだ。

B Lなんか喜ぶのは婦女子ぐらいだし、俺みたいな平凡な男が相手だと見栄えがわるいはずだ。

考えてくるだけで気分を悪くするのでこの先はできるだけ考えないようにしておこう。

できるだけ考えないようにしたのだが、授業中どうも松岡の言葉がひっかかり授業に集中できない。

普段から集中できてないけど、今回は異常だ。

外の景色とか眺めたり居眠りするのが普通だが、松岡の方に視線がいつてしまう。

ああ、俺はめっちゃ危険な橋を渡ろうとしていないか？

席が一番端の一番後ろのおかげで、誰にも気づかれず和恵にはノートを書いてもらえてるが、他人の目もあり気にすることがない。もし俺が真ん中の席だとしたら、世間の目を気にして、松岡などを見つめると言う行為など絶対しないだろう。

もう一度言っておく。ってか自分に言い聞かせておこう。

俺はいたってノーマルだ。

その言葉をおまじない代わりにし、なんとか昼休みまで耐え抜いた。

飯はいつもの正通と尊子と食べた後、松岡と目が合い、アイコンタクトを交わしてきた。

多分いまから屋上に来いと言ってるのだろう。

俺が立ち上がると、松岡も立ち上がり、先に屋上の方へ向かって行った。

「悪い、ちょっと用事があるから」

2人にそう言い残して、俺も屋上に向かった。

「一体なんだろうね」

「俺が知るか」

頭に乗っていた和恵が肩まで降りてきて、話し掛けてきた。

和恵は話し掛けてくるときと、授業の時以外は、常に俺の頭の上に乗っている。

そう言えばこいつ、昨日松岡に抱かれてから様子が変わったよな。
「岸本さんも松岡のことが好きなのか？」

「……………」

答えは無言。

まあたいていの女子はあいつの甘いマスクで落とされてるだけだけどな。

でも松岡のせいで俺が和恵にフラれたとなるとすごいムカつく。
告られてもきっぱりと断ってやる。

つと俺は屋上の重たいドアを開けた。

太陽の暑い日ざしが身体全体を照り付けて、何もなくても汗が吹き出そうだ。

もつと場所を選べよな。

俺でも校庭の木陰という、マシな場所を選んだっていうのに。

「待ちくたびれたよ」

待って1分程度のくせによく言うぜ。

「それでこんな所に呼び出して何のようだ？」

早く教室に戻りたいがため、俺はぶっきらぼうに言った。

「うむ、実は俺も意中の相手に告白しようと思っただ。俺は今まで真剣に付き合ったことがないからさ」

お前が相手だと断る女なんか一人もいないはずだ。女だったらな。

「そこで君に1つ聞きたいことがある。君は本当に和恵のことが好きだった、いや今でも好きなのか？」

「お前には関係ないだろ」

失敗したのはクラス全員知っていることだが、それ以降の俺の気持ちに干渉してきたのはお前だけだぞ。

「俺は真剣なんだ。はつきり言ってくれ」

つな、これって遠まわしに告白してるのか？

もしかして本当に俺の予感が的中したってことないよな？

いや、ここでまだ俺が和恵のことを好きだと言つとけば、こいつは諦めるかもしれない。

「ああ、今でも俺は岸本さんのことを想っている」

「そうか、それを聞いて安心した」

つと微笑みながら屋上から立ち去ろうとした。

「おい、話してそれだけかよ」

俺がそう言うと、松岡は振り返らず

「今日、俺は芝地さん、いや、尊子^{たかこ}に告白する。君が尊子^{たかこ}を狙っていないのなら、文句は言わせない」

ツとだけ言つて去つていった。

なんだ、あいつは尊子^{とつこ}ねらいだったのか。

俺は安心しきつて、その場に尻餅を着いた。

そつだよな、同姓相手に告白するわけないよな。

つてか流石に地面も熱いや。

俺は教室に戻ろうと立ち上がった瞬間、頭から何か落ちた。

それは今まで頭の上に乗っていた和恵だった。

「岸本さん、大丈夫か」

熱射病にでもなったか？

「大丈夫。大丈夫だけちょっと一人にしてほしいの」

一人にしてつて、こんな所に置いといていいのか？

「ちゃんと6時間目が終わるまでに戻るから」

つと俺より先に学校の中に入つていった。

やっぱりあいつのことが好きだったんだな。

俺は一人、教室に戻ったが尊子は既に女子達の輪の中にいて正通一人だった。

俺は仕方なく正通の後ろの席に座った。

席に戻った瞬間一番最初に出た名前は松岡の名前だ。

もう早速放課後に会う約束をしたらしい。

「おい正直、これってもしかしたらもしかするんじゃないのか」

正通が振り返り、嬉しそうに話しかけてきた

「俺が知るわけないだろ」

尊子が松岡とかあ。

微妙な関係だ。

「尊子そんこが断るか賭けないか？俺は断る方に賭けるから、お前はその逆な」

バカだこいつ。松岡に告られて、断る奴がいるはずがない。

ここでもう一回忠告しておくが、あいつの本当の名前は尊子たかこだ。

俺と正通がわざと違う呼び方をしているだけだ。

そろそろ正通も尊子と呼びたいだろうけど、恥ずかしいだろう。

俺もその一人だからな。

「その賭け乗ってやろうじゃねえか。勝ったほうが1週間の昼メシ奢ることな」

俺は快くその賭けに乗った。

「いいぜ」

つとガッツポーズ。

何がしたいのか本当にわからん奴だ。

つとここで昼休み終了の予鈴がなった。

第4話（前書き）

松岡が幼馴染の尊子に告白するとカミングアウトされ、それを聞いて和恵はどこかに行ってしまった。

正直はそれを気にもとめず、正通と松岡の告白が成功するか賭けをした

第4話

その後はいつものように、授業は寝倒して放課後を迎えた。

そう言えば和恵はまだ戻ってきていないな。

終わるまでに戻ってくるとか言っておいて、まさか何かあったのか？

万が一和恵が戻ってきてても、まだ帰ってないことを知らせるため、鞆は机の上に置きっぱなしで教室を出た。

ってか今思えば、あんな小さいの探しようがないじゃねえか。

廊下の隅々まで見ながら歩いてるが、見つかる気配は一向にない。

「正直、こんな所にいたのかよ。ちよつとこいよ」

つと正通に強引に腕を引つ張られ、連れてこられたのは裏校舎の3階だ。

俺たち以外にいろんな野次馬に似たような奴が集まっていた。

「ほれ、あそこ」

正通が窓から顔を出し、下の方を指を指した。

その指の先には松岡と尊子がいた。

お、いよいよ賭けの結果がわかるってことが。

でもここからじゃ全く声が聞こえない。

「ほら、これ付ける」

渡されたのは小さいイヤホンだ。

「なんだこれは？」

「新聞部から借りてきた盗聴器だ」

こんなんで情報を集めてたのか。

それより早く聞かないと肝心な所をききそびれちまう。

俺は急いで耳にその小型イヤホンをセットした。

「ごめんなさい。今はまだ返事はできない・・・」

しまった、告白の場面をききそびれてしまった。

「すぐに返事しなくてもいいよ。俺はいつまでも待ってるからさ」

つと満面の笑みで尊子に手を振りながらその場を去った。
相変わらずキザな野郎だ。

「賭けの件は延長だな」

小型イヤホンをはずし、正通に返した。

「尊子そんこだったら、キツパリ嫌つていうと思ったんだけどな」

つと腕を組みながら、正通は真剣に考えていた。

あいつも女つてことだろ。

色男に告白されて落ちない女など、女ではない。

いけね、変なことを力説するよりも和恵を探さなくちゃ。

とりあえず、教室に戻つてるかもしれないし、一旦戻るか。

教室に戻る途中何故か足が止まった。

目の前にあるのは図書室だ。

「和恵の最後の記憶つてここなんだよな」

意味もなくドアノブに手をかけて鍵がかかっているか確かめた。
開いている。

普段開いているのかは知らないが、俺が足を踏み入れたのは高校
生活3年の内初めてだ。

それほどこの図書館に来る人はいないってことになる。

本棚も机もこげ茶色の木造で既にボロボロだ。

でも妙に違和感がある。

ここまでボロボロで、あまり読まれなさそうな本がたくさん並ん
でいるのにホコリとか全く溜まっていない。

聞いた話では図書委員は名前だけであつて、やることは全くない
から、ほぼやる気のない奴が任命されている。

じゃあ何で・・・

「誰かいるのですか？」

ドアの方から女の人の声が響いてきた。

「あ、はい。いますぐ出ますので」

声の正体は図書委員の先生の奥村先生だ。

髪型は茶色のセミロングで20代前半という、学校1若い先生だ。この学校の男子生徒だったら、知らない奴は絶対にいないと断言できる。

「なんだ、藤原君か」

「なんだとはなんですか」

ん？なんで奥村先生は俺の名前を知ってるんだ？

この図書室に足を運んだのは初めてなのに。

「ごめんごめん。てつきり鍵が開いてたから、岸本さんが戻ってきたのかと思っちゃってね」

愛想笑いで返される。

でもそれがまたいい。

「先生、普段この鍵って開いてないのですか？」

「ええ、鍵は私と、岸本さんの二人しか持ってないからね。」

もう1つの鍵、岸本さんが持つてるから、もう1個合鍵作らなきゃいけないわね」

「そうですか・・・ん？二人しか持ってない？先生、今日この鍵開けたのは先生ですか？」

「いいえ、私じゃないから、岸本さんが・・・」

一体どういうことだ。

和恵はこの鍵なんか持ってなかったぞ。

俺とあの姿で初めて会った時から、何も身に付けていなかった。

そう言えば和恵の所持品は今はどこにあるんだ。

俺は振り返って、図書室を隅から隅まで眺めた。

ここから動いた記憶がないのだとしたら、残っているはずだ。

それがないってことは・・・

今まで気にも留めなかったが、おかしい所だらけだ。

俺は普段全く使わない頭を、フル回転させて考えていると、奥村

先生がちょうど図書館の真ん中の窓際の席に座った。

「ここがいつも彼女が座ってる場所なの」

「いつもというと？」

俺は先生の迎いの席座った。

「毎日。それで、今藤原君が座っている場所が私の席。そしていつも彼女と他愛もない話してたの。」

「昨日は、藤原君に告白された話だったわ」

「つな、和恵のやつそんなことを喋ったのか。」

「彼女すごい悩んでたわ。いつもならあんなに未練とか残さない子なのに」

「未練ですか・・・」

和恵は松岡のことが好きだったに違いない。

だから俺の告白を断った。

なのに何で・・・

あゝいろんな謎が混ざり合って、何がなんだかわからなくなってきたぞ。

「あら、かわいい。どこかで迷子になったのかしら」

先生は床から何かを拾い上げ、机の上に乗せた。

「あ、かず・クルル。どこにいたんだよ」

俺は和恵に手を差し伸べた。

和恵は何も言わずに俺の手を渡り、肩の上に乗った。

「あ、それ藤原君のだったんだ。へえ、クルルって言うんだ」

「はい、すみません。学校に連れてきてしまつて」

「私は全然構わないから大丈夫よ。他の先生には気をつけないとね」

「わかりました。それじゃあ俺はこれで」

「さようなら。また明日ね」

そう言つて図書館を後にした。

なんか自分的には不思議な体験をしたみたいだった。

どうして図書館なんか足運んだのかわからないが、もしかして、この謎を俺に解けと？

そんなわけないな。

ただの偶然だ。

「そういや、今までどこにいたんだ？」

肩に乗っかってい和恵に話し掛ける。

「……」

なんの言葉も返ってこない。

靴を取りに教室に戻り、靴を履き替え、校門を出ようとしたとき、
やつと和恵が口を開いた。

「お願いがあるんだけどいい？」

「ああ」

「私の家に寄ってほしいの」

「そうか」

俺はあえて理由は聞かず、俺の家とは反対の和恵の家に向かった。

第4話（後書き）

暑いですね。今年は特に・・・

ここ1ヶ月熱中症で死んでました。いや、冗談抜きでマジでw

これから今までの遅れた分を挽回していきたいと思いますので応援
ヨロシクお願いします！

第5話

和恵の家は学校から駅まで歩き、そこから電車で30分というかなり遠い所にある。

しかも駅から更に20分近く歩かなければならない。

「これがお前の家か……」

入り口は大手門みたいな感じで、そこから木々に囲まれた道を更に歩くこと5分ちよい。

その木々の道を抜けると、木に囲まれた東京ドーム並の高原が広がり、その中に白い屋敷がドーンとあった。

「ここから先はセキュリティシステムが働くからここで待ってて」
つと和恵は俺の肩から飛び降り、屋敷へと走っていった。

俺の足でも屋敷まで歩いて5分くらいかかりそうなのに、あんな小さい和恵が一人で行くとしたら、かなりの時間を要するだろう。

それに屋敷の中を回る時間も含めば、軽く1時間は超えるだろう。
「どうするかな」

遠くからは犬の鳴き声が響いてくるわ、門が勝手に開くわって……
「え？」

「藤原君へ逃げて」

ちよつと待て待て、かなりの数のドーベルマンに追われて、逃げ帰ってくる和恵。

俺も瞬時にこの場から立ち去りたかったが、和恵を置いていくわけには……

和恵を待つより迎えに行く方が、明らか早いと判断し、瞬時に和恵を拾いに行き、全速力で走った。

しかし、ドーベルマンは諦めずに追ってき、ようやく大手門を抜けた所で、振り切った。

「大丈夫だと思ったんだけどな」

「何が大丈夫だ。捕まったら不法侵入で訴えられる所だったぞ」

捕まっただけでも立派な不法侵入だったけどな。

でもこれでこっそり入るのはままだらなくなったってわけだ。

正攻法で真正面からいっても、和恵本人がいないのに、家の中に入れてもらえるわけもないしな。

「結局何を調べたかったんだ？」

俺の肩にしがみ付いている和恵に問うた。

「……」

「言いたくなかったら別にいいさ。それじゃあ家に帰るぞ」

つと俺が駅の方へ足を進めた時、和恵が口を開いた。

「鞆がないか調べたかったの」

「学校のか？」

ほんの微かだが首が縦に動いた。

俺もさつきそれは気にはなっていたんだけど、全くわからない。

本人がそのリスの姿に変わってしまったのなら、持ち物は残るはずだ。

それがないってことは和恵の本体と一緒にあるのは明確だ。

でも本体が行方不明だからこんな大事件になってるんだけどな。

そんなこんなで、今日は帰路についた。

「ただいい……」

家に入たとたん、黒い煙に襲われた。

「ゲホゲホ、なんだよこれ」

煙に出所は台所のようなのだ。

「お兄、フライパンが」

「はあ？」

見るとフライパンとその横にあった鍋と一緒に業火のごとく燃え上がっていた。

瞬時に判断した俺は、水道の蛇口の指で出口を抑え、炎の方に水が出るようにして、鎮火させた。

そのあと当然ガスも切ったが……

「これは一体どういうことだ？」

フライパンの上には炭化した魚のようなものに、鍋の中身は空で取っ手がドロドロに熔けていた。

聞く話によると、今日は母さんは主婦たちの集まりで、いないらしく晩飯の出前代を置いていたのにも関わらず、でしゃばって料理をしようとしてこうなっただけらしい。

「まあ、過ぎたことはしょうがない。今からピザでも頼んでやるから、金」

「材料費に全部使っちゃった」

そんなにかかるはずないだろ。

どうせ残りのお金でお菓子でも買ったに違いない。

その証拠に、机の上に食べ散らかしたお菓子に、ゴミ箱の中にもお菓子の包み紙、それプラス菓子棚の中にもまだまだ豊富なお菓子が残っていた。

そんなに在庫を置いとくような家じゃないため、すぐにわかった。ざっと、材料費500円、お菓子1500円という内訳だろう。

「私お腹いっぱいだから、今日の晩御飯はなしでいいよ」

「私も」

という徹底的な証言まで残して二人は2階に上がっていった。

そりゃこれだけ菓子ばっか食ったら充分だろ。

「っておい片付けぐらいしていけよ」

しょうがない、お金は後で母さんに別に貰って、俺は家にある残り物で何か作るとするか。

冷蔵庫をとりあえず開けてみたが、いろんな物がありすぎて、逆に何を作るか迷った。

少なかったら、適当に全て使って炒めたり、揚げたりできるんだが、こう種類が豊富だとかえって困るし、作る気もなくなる。

それにまずは台所の片付けという試練が俺には待っている。

「これじゃあ逃げ出したくなるよね」

和恵がブレザーのポケットから顔を出して言った。

「でもほったらかしにしてたら、俺にも雷が落ちてきそうだしな」
そう呟きながら、とりあえず焦げを取るためゴム手袋をし、金たわしでこすり始めた時、ベルがなった。

準備万端でさあこれからつてときに、何で誰か来るかな。

めんどくさい、居留守だ居留守。

「出なくていいの？」

何度も鳴り響くベルを気にし、和恵が俺に聞いてきた。

因みに和恵は掃除を始める前にブレザーの中から、机の上に移動させた。

「こんな時間に来る奴はどうせ、どうでもいい奴なんだよ」

そう言った瞬間玄関のドアが開いた。

「こんばんはー」

尊子だ。

「へえ〜どうでもいい人ねえ」

普段はどうでもいいんだよ。

「うわ、なにこれ？こげくさっ」

入って来た途端、第一声がそれか。

「なんか用か」

「うん、ちよつとね」

ん？なんか歯切れが悪いな今日は？

松岡に告られて、まだ迷ってるのか。

でもそんなこと今、聞いたら駄目だ。まずは・・・

「え？何これ？」

俺は有無を言わずにゴム手袋と金たわしを渡した。

「ゴミ袋はそこな？つで雑巾はその戸棚の中」

そう言つて、また焦げ取りの作業に戻った。

「しょうがないわねえ」

ぶつぶつと文句を言いながらも、掃除を手伝ってくれた。

おかげで、母さんが帰ってくるまでに片付けることができた。

「やく悪いな、わざわざ手伝いにきてもらって。しかも飯まで作ってもらって」

「別にいいよ、ってこんなことしに来たんじゃないの」

ああ、そういえば何しに来たんだ？

「きつと松岡君のことですよ」

和恵が俺にそつと教えてくれた。

「松岡のことか」

「え、あ、う、うん」

どうやら図星のようだ。

図星をつかれたぐらいで、慌てるとはまだまだ子供だな。

しかも急におとなしくなりやがって、話づらいじゃねえか。

「藤原君が単刀直入に言うからでしょ」

そんなこと言われてもなあ。

「正直はどう思う？」

最初に口を開いたのは尊子だった。

「何が？」

「私と松岡君と付き合っの」

また変なことを聞く女だな。あの松岡と付き合えるんだつたら尊子にとつてもラッキーじゃねえのか？

それとも他の女を敵に回すのが怖いからこんなことを聞いているのか？

その前に・・・

「なんでそんなこと俺に・・・ってイテッ」

急に和恵が俺の耳たぶに噛み付いてきた。

「そんなこと絶対に言わないで。相談してくる方の身にもなってあげなよ」

和恵に注意された。

確かにそんなこと聞く必要ないな。

「どう思うとか関係ないんじゃないじゃねえのか？自分がそれでいいんだつ

たら俺もいいと思う。

松岡と付き合ったことで、俺たちの仲が悪くなるとか考えてたのか？
？だったらそんなの気にするな」

そのまま自分の考えを口にした。

「うん」

なんか元氣のない返事だけどこれでよかったのか？

でも俺に期待通りの返事をしろっていうのが、難しいだろ。
ってか期待通りの返事ってなんなんだよ。

「送らなくていいか？」

帰る際、俺は玄関まで見送った。

「うん、大丈夫・・・岸本さん」

「え？」

「岸本さんの気持ち、今ならすごいわかる気がするよ」
「？」

そう言い残して、尊子は帰っていった。

「藤原君、ってもしかして鈍感？」

ん？・・・あー

俺はやっと今まで忘れてたことに気づき、家を飛び出した。

「やっと気づいたのね。だったら・・・」

「ラッシュの散歩忘れてた」

ガブ

「いって〜」

さっきの数倍の力で耳たぶをかじられた。

「何するんだよ」

「もう知らない」

一体なんだっていうんだよ。

第5話（後書き）

約215日の期間を経て5話を投稿という見事なサボリっぷりから脱出した作者だが、もうこの作品読んでる人はいないだろうなあw
一時は作品自体削除させようと考えましたが、初の恋愛モンなん
で完成させたいと思いますので、暖かい目で見守ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1840c/>

彼女は俺のペット!?

2010年10月10日15時15分発行